再刻

法華題目和談繪鈔

下

特36

631

再刻 法華題目和談繪鈔巻下

十七

経の字乃事

叡経とは。一切の経の字は。由乃字の義理なり。由の字は。思意をばよろこむと讀む字なり。経は佛の御口より。由りてあるゆへ。経といふ。経はよると読む。由の字の義理なり○又次に。経は緯の義なり。世上の綿金襴などを織るに。たて横よりあひて。牡丹唐草などの紋を織つけ織出したりのなり。佛の経は緯の如く。菩薩まつて経を根本として。論と

ふを作り出へり。菩薩の徧ハ模の如く。佛乃經々たて乃如し。此佛菩薩の經と徧とよりて。一切庶生得道するハ。たて模より合せて。綿ぶどの紋と。織出るゞ如し○まさ次ハ經ハ。契の字乃義理ゆり。契の字ハうなふと読む字ゆり。經ハまくの庶生の氣ゆ。篤くとかなひ。又一切の道理義理ゆ。篤とよく合ふる故ゆ。經とハかふふとよむ。契の字乃義理ゆり○又次ハ經ハ。法華とハて義理ゆり。佛一句を書出しゆふゆ。其一句ゆゞ根本と

法華守護の諸天善神を祈念するの図

あつて。無量無邊の法門を發出しまへり。一句一言が。無量の法の根本となりしが經あれば經の法本となる義理あり○まつぎに經の微妙といふ義理なり。微妙といふは。如し根の多數なるといふことあり。佛四辯八音の四聲を以て。すべて說給ふなり。潮ふるは義理深くある事。大海へ入る次第深きが如し○まつぎに次は經の涌泉といふ義理あり。涌泉といふは。ひくいづることと湧む字あり。佛經を說給ふは義理。ながるることとなるきはと。涌泉の如し○まつぎに次は經の繩墨といふ義理あり。繩墨といふは。なるとすみを墨を引あて。曲れる木を切り削り。其直なるが如く。佛の經の一切衆生の邪曲をすぐよなをすゆへあり。

十八

六塵をもつて經となる事

又次は六塵をもつて經となる義理あり。六塵とは。色聲香味觸法。この六ツを六塵といふ。始めは色といふは。一さいの同よりゆるわどめ。色形ちある物の事あり。聲といふは。一切の耳に受ゆる程の

声聞の法とあり。香とは。一切の鼻よ入ほどの。善き香ひ。悪き香ひのことあり。味とは。一切の舌のうへよ。載せるるわどの味ひの法とあり。舶とは。一切の我慢よ。舶あるるわどの物の事あり。法とは。総じて一切の諸法の法とあり。此色色香味舶法の六塵ぞ。則ち経とある所。三乗細の経とは。ハよるる義理あり。何物よ由てありても。悟りを開きさんすれば。則ち経あり。苦し飛花落葉を見て。経悟りを開き人

あり。飛花落葉とは。花乃葉の義を見て。万法とは。無常生滅の法をして。一法として常住の法なしと合点し。悟りて悟道す。此人のためよ。是これ経あり○経ハ色形ちありて。目よ見ゆるものなるゆへよ。色塵とは中あり。経ハよるとは義理あるべ。色形ちある色塵の。耳よきりて。悟道をるゆへよ。一切の色塵とは経あり。此よ由りて。悟道をるとも。物の香ひを嗅で。悟りを開くとも。物の味を嘗て。得道をるも。一切の

高祖大士の
説示し給ふ
法要聴聞
の図

ものを。膚へよ觸て悟道をるも。皆同じ事あり。
角ぐ同じくべ。月を詠め。紅を見る時も。心を止め。眼
をつけて。三諦即是の妙法をと見るあるべ。蓮糸
紅山をまき。悟りの種とるべし。蓮糸紅山の雲の
色。月の光りまでも。心を催し思ひあ
て。車を舳を形を付ても。後世を心よかけ。風流さ
村雲まうふ夕も。高くこの事ふかく。妙法をとるへ
きんこと。根性の若開後世の事引あるべけき。
角ぐんよ高くるあうき。妙法の夢覚かく。蓮花

の紅ぶさ高く。絶の糸すぐ直うして。手程り絶ば。
いま牡を筆よいとせて。あ字の妙歌のを。

十九

釈迦如来大恩妙のき事

鬼てもかくても。此妙法を持させて歌舞ふかしを
連をも。三身完竟の佛よ。ふさんと思ひ上げ有よ入も
く世を出ひて仕度しを。此恩の深く深き
ふと。恒河の砂の数よりも修業し。誓願よ山三
界へ。恭しくなりと後世をへば。まさしく成生
の為乃主君あり。次の文よ。手中成生へ。悲是吾子

あらと説まへど。衆生の為乃父なり。壽量品よハ。仏をもつて衆生をして。無上の道よ入しめさせんと説まふハ。元来ハ法華に衆生を引入しめんがため。種くよ教をあーまふ。色まさ衆生のため乃師なり。ハ三つの徳を備へまふ。かゝる有縁の法仏よ背きよ。あくも縁かき余所の土乃孫陀羅師大日尊の仏を恃ミ邪ふ人ハ。父よ不孝の子なり。君よ不忠乃臣下なり。師よ背く弟子なり。ハつゝみまゝ〳〵ゝ悪所のがる為かゝゞ恐しまゞく。

是いこれ。手大言とのぶるものなり。ハ如ようき御悪。経豫釈等よのせゝられたり。華てかゞへゞ。華厳経縁起疏よ。十悪とあげゝ迷たり。曰く第一発心善被の悪。ハ善人悪人の隔あく。衆生よ善く悪と義むゝ。ふよりハ心よ苦悩と都す。ハ悪なり。第二雑行苦行悪衆生の為よハ心を苦しめ。ある人ハ姫の釋よハ角をかくれ。又安時ハ鎌くる虎よ餌食とあり。捉婆羅よ説まへる。堂首如芥子許捨身命處とやて。芥子粒ばかりも衆

生の為なり。乃身を捨て法をばといふ所詮なり。
形乃ばらく。雖約教なれども乃恩あり。されども
教経なれ。此御恩を佛乃果を得ぬ。本因と云
ほどの事なり。第三垂迹六道恩。六道界のまゝ
よ。一々御形ち変じ。地獄なれば地獄
なり。餓鬼畜生も又おなじ。乃至人間天上もまゝかく
の如くにして。苦しこと救はせぬ恩あり。第四
一向為他恩。かゆるふしぬ大慈大悲ハ全く自身
乃為なれば。衆生のためなり。所

恩あり。第五随逐衆生恩。衆生の願ひに随ひて。
法を説。為安しぬふこれあり。第六大悲深重恩衆
生の苦しこをぬき。助けぬ支深き重きこと。
第七隠勝劣の恩。ぬしても勝れたると先隠し。
劣をとりて。説きよう深きこと至りしめぬ
ふこれあり。第八隠密顕権の恩。たゞめい示義等
の権門を説き。次い大乗の密理を説き顕しぬふ。
是あり。第九示滅令慕の恩。佛あがく世をおはし
ませど。衆生いつものやうに思ひ奉り。たゆみ

勤業のこいやまし。佛道よりをく深くなるゆへよ。
かりよ涅槃の相を示して。底生よ佛を意ちさい
め。佛をよ示ちしまし めをふこれあり。第十無礙
無碍無礙にして常よ底生を惱しを情をふこと。
量ちさ沙無礙あり。以上これを十恩とす。とりまけ
意ちさ沙事あり。すべて三世の諸佛の。佛ありしを
ふもこんを此久遠実成の。釈尊乃ち恩ありざるを
ちし。横よ十方堅よ三世の仏達いづまう釈尊の
ち身を。まりけをいざるやある。凡そ此三千大千世界

よあゝゆる。山も海も。石瓦草木までもたゞひまでも。皆釈尊の法恵によりおこきてり。山方よ有情非情。草木國土。悉皆成佛とゝ説玉へり。抑此経文ハ行方かゝる類なき。佛ようなゝせるゝや。是此の妙法華経よりてなり。今末法の凡夫も。又聖の如し。只くこれをゝのむ所ハ。信の一紙急るべかゝべ。たのもしやゝ

二十

臨終大変の事

御書に。賢こきも老たるも。若きも定めなき習ひ

あり。先臨終の変を習ひて後。化事を始ふべし。又御書よ。日蓮若かゝし時より。現世の事を祈ゝず。たゞ未来佛よ成ゝんと思ふばかりなりとぞ。誠ようげろふの夕べを待さず。夏の草秋を知らねよ比ぶまじ。人ぞかり久しきなゝふど。古田の法師ゞ書おきしハ。さるいとまあれども。聖人とても。出る息入る息を待べ。只今後よ死の来るをも。知ゝぬ身ゝとして。なごさ後の世の事急り務あるハ。愚は中のおろかなり。必ず死るなゝひハ。

誰も人も知り難し。朝露のごと消やすく。余波の中に思ひたぐらる。心ざしわど奪ひ放ち。惜めども留らぬ月日に。いつしか老さらばひて。ちりぬるかたち姿。髪おろく腰曲りそれも人くねる面影とのこと変りゆき。昔とき人の頭ありとても。年の積れる事は消る事をゆるさず。移るとろあるき世よ心を留りんは。返すぐもとの如。かれ及ぶべぬ命の使ひあり。されよ付ても。今日の如来い。久遠の昔より以来。今

まで死ぬといふ事あく。生れぬふといふ事もなく。三世常住ある御身あり。今法華の行者は。此の如来をこの三ありかんるめで成佛と。平均あるんんぴとんよ妙法の力あり。此時いつの法ぞや。修行の多べありと。常に心よ絶ぶこれを思ふべきあり。此度頼ひとづきあべ。入いつの時ろ。人の姿ようかび出て。此妙法よ遇ちんん。朝暮心ようけて唯今すやくと。修行の思ひをなし。立時も居るときも。妙法ちるべうべいうある前

臨終の時妙法信受の図

の世はむくひありてうゐのなるゝき病ひを身にうけ。阿鼻地獄に堕せんもをそれぬべし。人乃身未あり。正法念経よ。阿鼻の時。断抹摩の苦しみをとゞ。後世を思へる。力をゆて身肉を切るゝ者。或ハ刑ゆうの物をて形よりをこうき。ゑ。ハ瓜を以て身を磨るゝゆうなる。苦しみを得ると。断抹摩とハ中ゝかや。一書よ眼識滅すとて。眼まゞ死て物をゝんぞ。二ゑハ耳根絶すとて。耳死て聞こゝゞ。三ゑハ鼻。四ゑハ舌。五ゑ身と。箇様よ次第くゝ命

のさ紀づけして。皆うかゝび。只意の一ツのみ殘
りて。上件の苦しこを受るあり。此時心より四つの
愛をあす。一まゝはけ身に色をふして。命を惜む。
二まゝ妻子けんぞく等よ。愛執ゆゑく。命を惜ミ。
三まゝ財寶に貪ふゞ色て。心よりあれど。四まゝ来
来其人の約べき。三悪を犯るゝ。皆已ゞ
むくひよれがあり。時ゝ其悪報をうんて。ちやく
約んと。ちやく所ゝ執んを為ば。おれゝの執色。又
三界流轉のたすけとありて。迷をするありと說

玉へり。此時より玉りてハ。いのなる信者ハ。此經
よたぶ〳〵うされてハ。一大事を忘れつゝ。かゝる
故よ。他会の聖經として。常よ仏よかけよと。先師たち
教へ玉へり。角ゞ此をりよ玉りてハ。年法唱へ教へ
まる。妙法ハ只今ありと。仏よ会ゞ極めて。彼四ッの
老僧おゝ〳〵ゞ。天魔来れりと仏よいまめ。三大秘
法の大曼荼羅よりも向ひまり。法華契約たゞ〳〵玉
ふ。ふの一筋よ。日蓮大菩薩を仰ぎ。如説修行抜
よ教へ玉ふ中りに。雑を捨て身をもるゝ。

是まはらうを打ちうちもさらくいとまなくたとへ
舌こゝりてはよはけれども心よとなへまう。
命の通えんきうの事の一念三千たる。寿量品の
南無妙くと唱へ。煩悩生死と
ゑんくしも。水の泡の美とうたゝめ。菩提涅槃と開しも。今
日の現とふりて。松の下の千代寂光ゝ。是人
於佛道決定無有疑。此時ゝ。

再刻法華題目和談繪鈔巻下 終

元文五年申五月　原　版
明治十七年十二月六日再版御届
同　十八年一月　刻　成

原版人并ニ再版出版人　京都府平民　村上勘兵衛
上京區第廿九組曇華院前之町九番戸